

文 高橋 誠

text by Mac Takahashi

学校法人慈恵大学広報推進室長
医療・健康コミュニケーター

クリミア戦争に看護婦人団長として赴任したナイチンゲール（1820～1910）。軍事病院での活躍、衛生環境への厳格な対応、すべての患者への差別なき気高さ、上流社会通念や偏見・理不尽・権力と闘う正義感、自己犠牲

覚え書』（ノーツ・オン・ナーシング）で「看護」について、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、食事内容を適切に選択し、与えること、これらすべてを「患者の生命力の消耗を最小にする」よう整えることと表現しました。

減らすハードなもの。だからこそ、患者はそこに天使を見る」
生誕二百年、ナイチンゲール精神は、いまま日本の看護の現場に脈々と息づいています。

Medicine Health
医療・健康分野のスーパーパイオニアたち

「看護婦教育所創設の地」記念碑（東京港区慈恵大学内）：ナイチンゲールが看護教育を行っていた英国セント・トーマス病院医学学校で学んだ、日本初の医学博士高木兼寛は、成医会講習所（医学教育所）、有志共立東京病院（のちの慈恵大学病院）と共に日本初の看護学校（現・慈恵看護専門学校）を設立。「病気を診ずして 病人を診よ」「医師と看護師は車の両輪」の医風を実践する質の高い医師と看護師を育成した。

と寛容の精神、理想とする看護への信念は、アメリカ、オーストラリア、日本にまで伝わり、「近代看護教育の母」「ランプの貴婦人」「クリミアの天使」と呼ばれました。

ナイチンゲールは、その著書『看護

ナイチンゲール生誕二百年、
今も息づく、患者の生命力の消耗を
最小にする“精神”

フジサンケイグループのシンクタンク・エフシージー総合研究所の境政郎相談役は、慈恵大学病院での闘病記「楽しくなければ闘病じゃない・心臓バイパス手術を克服したテレビマンの回想記（日刊SPA！連載全55話）」の第35話「ナイチンゲールの申し子たち」で、以下の通り述懐しています（要約）。

「慈恵大学病院に入院中、患者の生命力の消耗を最小にする」という『ナイチンゲール精神』が院内に掲示されているのを見て、『なるほど』と得心した。

約2カ月間の入院中に30人ほどのナースと出会ったが、すべて白衣の天使に見えた。看護の仕事は神経をすり



高木兼寛はセント・トーマス病院をモデルとして、日本初のナイチンゲール病棟を設立。「大部屋に大きな窓、外を眺めたり換気したりしやすい」「ベッドとベッドの間隔を十分に確保」が特徴。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。
東京生まれ横浜育ち。慶應義塾大学経済学部卒。ミスノ東京広報宣伝室、リクルート宣伝企画部、米国印刷会社 NewDesignConcepter（LA 在住 12 年）、食品会社エグゼクティブ PR アドバイザー、ゴルフ場経営など日米複数企業の広報・マーケティング職を経て、2004 年より現職。「病院広報研究会」、「湾岸下町ライフデザイン戦略会議」、「経営戦略ユニット・海医会」主宰。
ダイヤモンド・オンラインで連載コラム「森田療法式・心の健康法」を執筆中。
趣味はゴルフ、ワイン（日本ソムリエ協会ワインエキスパート# 58）。